

NEWSLETTER 2013 年 4 月
Vol. 7

AJWCEF からのご挨拶

会員の皆様におかれましては、平素より AJWCEF の活動にご理解とご支援を頂き誠に有難うございます。

2012 年には、ここクィーンズランド州の政権が変わり、環境に関する政府の取り組みにも変化が見られます。その代表的なことは、大コウモリに対する対応です。皆様ご存知のようにクィーンズランド州は熱帯から亜熱帯気候に属し、多くの大コウモリが生息しております。このコウモリは集団生活を行い、大きなコロニーでは 10 万頭を越す場合もしばしばです。この動物はオーストラリアの森、すなわちユーカリの森、を維持するために非常に重要です。その理由はこの動物が、ユーカリの受粉活動や多様性の維持に大きく貢献しているからです。オーストラリアでは 600 種以上のユーカリが生息していますが、その多くは夜半から明け方にかけてのみ受粉が出来る状態になります。夜中に受粉を助ける活動が出来るのは、夜行性の大コウモリくらいなのです。このため、大コウモリの助けがなくなれば、ユーカリの多くは子孫を残す事ができなくなり、森に大きな変化が起きることは明かです。オーストラリアの多くの動物はユーカリの森に順応して生きてきましたので、その森が維持できなくなれば、この動物たちが多大な影響を受ける事は必至です。よって、大コウモリはオーストラリアでは保護動物として守られてきました。

しかし、昨今の人口の増加と開発に伴い、大コウモリのコロニーの近くにも多くの住宅が建ちました。その住民はコウモリによる騒音と匂いの問題からコウモリを追い払うよう行政に働きかけています。また、フルーツ農家は大コウモリ（主食がフルーツや花蜜）がフルーツを荒らす事から、保護動物にも拘らず銃で淘汰する事態も起こっています。さらに、近年発生している致死率の高い伝染性疾患のいくつか（リサウイルス（狂犬病の親戚のウイルス）やヘンドラウイルス（現在コウモリから馬、そして人に伝染する）など）の自然宿主（運び屋）が大コウモリであることが解ってきました。この様な理由から大コウモリと人間の共存についてはオーストラリアで大きな社会問題となっています。

以前からそこに住んでいたのは大コウモリであり、都市開発によってその地を追われていく例は、他の動物、例えば以前にも触れたコアラなど多く見受けられます。しかし、現在のコロニーの場所から大コウモリを追い出せば、別の場所へ移動し、そこで同じ問題が繰り返される可能性が高いのです。そもそも、そのような共存の難しい問題が発生するかもしれない地域に開発許可を出す行政の方針が問われます。前にも述べたように、大コウモリはオーストラリアのユーカリの森の維持を担っています。この動物を淘汰する事は可能かもしれませんが、その後にオーストラリアの生態系にどのような影響が出るかを考えると、非常に心配です。AJWCEF は皆様からの会費や募金を活用させていただき、人間社会との共存を考慮しながら、これらの動物たちの生息地の保全や拡大に努めております。今後も AJWCEF の活動にご支援を頂きますようよろしくお願い申し上げます。

オーストラリア日本野生動物保護教育財団
理事長 水野 哲男

オーストラリア連邦政府と豪日交流基金は AJWCEF の新しい教育企画、
オーストラリア日本間の環境及び野生動物保護に関する中継教育に対して後援しています。

2013年3月トレーニングコース（初級）レポート

日本大学 生物資源科学部 獣医学科 KEN



ユーカリ植林活動の様子

その一端をこのトレーニングコースで学ぶことができます。

野生生物と「共生」していくためには、生物だけでなく人間や生息地のことも考える必要性を感じました。その地に住む人々にどんな在来生物がいるのかを知ってもらい、共生への理解を啓発していくなど人間に対しての取り組み。植林をして生息地の断片化を防ぐコリドー（回廊）を作ったり、生息地を横切る線路の建設計画の変更を州政府に訴えかける取り組みなど生息地に対する取り組み。州の職員やボランティアが、人間も動物も幸せになれるように、いくつもの実践を探り、実行しているのを目の当たりにして、学ぶことができました。オーストラリアには日本よりも進んだ面がある一方で、財政難による環境保護、野生動物に



入院しているコアラに補助食を与える様子

僕自身が日本の現状についてあまり知らないことに気づき、もっと学ばなければというモチベーションにもつながっています。

また、実習以外の時間も非常に充実した時間でした。英語を使わざるを得ない環境で、文法は間違っていようとも会話は成り立つし、英語を「使う」ことについて自信ができました。さらに、同じグループの人とスーパーに買い出しに行きご飯を作り、食べて、話す日々を過ごしました。最初は初対面だったメンバーとも仲良くなり、帰国してからやりとりをして、今後刺激を受けて成長しあえるような友人を得ることができました。

増え続ける人口とともに土地の開発がすすみ、もとは野生生物の生息地だった土地を追いやり、絶滅の危機に瀕する生物も多い現状。そのなか、オーストラリアではどのように「共生」をしていこうとしているのか、

かけるお金の削減や、市民の関心の低さなどといった課題もあることを学ぶことができました。

オーストラリアの

現状を知ることで、

日本獣医生命科学大学 獣医学部 獣医保健看護学科
大和田睦美

トレーニングコースでは野生動物を学ぶ面でも生活面でも、毎日がとても充実していました。現地で動物を実際に見て、飼育やケアを行い、その動物にはどうい



ケアラーに育てられている
ボッサムの赤ちゃん

った体の特徴があるか、どのような行動をするのかなど自

分の目で見て知ることができました。餌の準備や解剖実習など、すべてが初めての体験で、興味深いものばかり、毎日が驚きの連続でした。

また、このトレーニングコースを終えて、野生動物を守りたいという気持ちは確かなものになりました。傷ついた野生動物や孤児となってしまった動物の赤ちゃんはテレビなどで何度もみましたが、実際に目の当たりにすると、「助けなきゃ。」「私たちが守らなきゃ。」と強く感じました。イプスウィッチコアラ保護協会の方々の活動をみて、一般の人々の力が大きなものであることも知りました。野生動物を守るには、救助や治療だけでなく、その動物が安全に生きていける生息地の確保も同じくらい大切という言葉は特に印象に残っています。

初めて会ったグループのみんなとは、自炊を行い、生活をともにしているうちに、いつのまにか実習と一緒にがんばる「仲間」になっていました。みんなと野生動物について熱く語ったことは私自身とても刺激されました。実習以外の時間もとても有意義なもので、最高の思い出です。

今回の実習で得たものは大きく、コースを終えた今、参加前より成長した自分がいます。今回学んだことを生かして、これからに繋げていきたいと思います。



イプスウィッチコアラ保護協会にて
野生動物ケアラーと。

IPSWICH KOALA PROTECTION SOCIETY

『赤ちゃんコアラ ベイリー (Bailey) を育てた日々』

BY イプスウィッチ・コアラ保護協会 ヘレン ダーベレイ



何年も経った今振り返ってみれば簡単なことのように思えます。でも当時はとても大変でした。私が目覚める度に最初に考える事といたらいつもベイリーの事でした。(2時間おきにミルクをあげていたので100回、いや多分1000回は起きなければいけなかったでしょう。) 節目になる出来事だけを記録してもいいのですが、それでは半分しかお伝えできないでしょう。だから、最初からお話ししたいと思います。

最初にベイリーと出会ったのは、実は彼のお母さんを通してでした。お母さんコアラが6月21日にトゥーウンバという町で交通事故に遭ったのです。

ボランティアでやっているレスキュー活動で、彼女をモギルコアラ病院に搬送したのが6月23日のこと。そこで彼女の袋の中に小さな赤ちゃんがいるのが判ったのです。お母さんコアラは一週間頑張って生きました。でも、ついに助からない段階に至り、思いやりを持って安楽死させる事となりました。



母親の体の代わりとなる保温ボックス

私は調度その時その場に居合わせたのでした。ベイリーは人間の手で育てるには小さすぎると思われました。でも彼は生きています。だから彼はチャンスを与えられなければなりません。90%成功しないという見込みを告げられた後でも、私は頑張ってみたいと思ったのです。

6月30日、彼は私の子になりました。彼の体重は56gで私の親指に比べてもそんなに大きい訳ではありませんでした。体毛はなく、目は閉じ、耳も頭部に平たくくっついていました。私は彼をとて素敵だと思いました。そしてすぐに私はベ

イリーと名づけ最初のミルクをあげたのです。1mlのDIVETELACTというミルクを彼は数秒で飲み干しました。保温ボックスが彼の母親の体であり、大きい靴下が育児嚢、そして湯たんぽがお母さんの体温の代わりをしました。温度計を持っていなかったの(といっても当時は何度で保ってあげるべきかよく分からなかった)ので、持っていたにも助けにはならなかったとは思いますが…私は唇を使って彼の温かさを判断しました。

それから3週間の間、彼は順調に体重を増やしました。一週間ごとに、ミルクの量を0.1mlずつ増やしていきました。…そのあと本当の問題に初めてぶち当たりました。7月25日、温度調節が上手くいかずベイリーを温めすぎってしまったのです。彼が回復するのに20時間もかかりました。(これに関する日記の記述をここに入れようかと思いましたが、数年経って再度読みかえてみてもその時に感じた恐怖と絶望が蘇ってきます。) もちろん他にも歯が生えてきたり、(腸内細菌を与える為にコアラの便を食べさせる)パッピング(papping)などの幾つかの比較的小さな困難もありました。彼はただただそれらを乗り越え生き続けました。(2時間ごとにミルクをあげる時期が終わったあとの2、3週間といった私はゾンビのようでした。2つの目覚まし時計を使う事になってしまった程です。)

ここからは冒険物語を短くするために節目となる出来事を記します。

7月10日、耳がしっかり立ちました。(体重76グラム)

7月16日、目が開き始めました。(体重94グラム)

7月21日、目が完全に開きました。(体重100グラム)

8月中旬までには、毛が生え始めました。(体重144グラム)

9月1日、初めてのパップを食べました。(体重 190 グラム)

9月4日、ユーカリの葉を食べ始めました。

翌年1月までには、彼の部屋に設置した止まり木で生活を始めました。(660 グラム)

1.8 キログラムになって離乳過程に入り、2.3 キログラムで完全に離乳しました。

8月31日、およそ生後16ヶ月のころ、ベイリーは2.6 キログラムになり、コアラ病院の幼稚園に入りました。

幼稚園で落第し、もう少し成長する為に私の家に戻ってきました。(臆病なママっ子ではなかったのですが)

1月13日に、二度目の幼稚園でめでたく合格し、クロウズネスト国立公園に放たれました。

しかし、そこで二度目になりますが、野生での生活にも失敗してしまいました。(本当に臆病なママっ子ではなかったのですけど)

そしてその後、とうとう無事に野生に帰り、それ以来会うことも彼の悪い報せを聞くこともありません。



ヘレンさんとベイリー



ユーカリを食べ始める



木登りの練習



幼稚園に入る

人の手で育てられたすべての孤児に関して言うと、便りがないのは良い知らせと考えるしかありません。私たちができる事といったらセカンドチャンスを与えることです。グッドラック、ベイリー。あなたは生きるために本当によく闘いました。長生きしますように。

彼が生き残れた秘訣は何だったのでしょうか？知っていたらなと思います。たぶん、彼は生きる運命だったのでしょうか。これは、間違いなく経験や優れた管理のお蔭というよりも幸運なケースだったと思います。

現在ベイリーが生きていたとしたら、14歳になっているのですが、残念ながら通常、野生ではオスのコアラはそんなに長く生きられません。でも願わくば、この数年の間に何頭かの子供のお父さんになってくれると良いなと思います。

(写真提供：イプスウィッチ・コアラ保護協会 ヘレン・ダーベレイ)



ユーカリの森に放たれたベイリー

有袋類の赤ちゃんは人間の赤ちゃんよりもずっと未発達な状態で生まれてきます。ベイリーのような小さな小さな赤ちゃんを人間の手で育てることは、本当に難しい事だと思います。発達段階に合わせて赤ちゃんが何を必要としているのかを確実に知っておかなければなりません。そして、それに適切に対応しなければ成功しないのです。

当然ながら人間のお母さんには育児嚢がありません。赤ちゃんのために温度を調節することも一苦労です。また、二時間おきにミルクを与えるために、夜中に何度も起きなければなりません。ヘレンさんは24時間いつでも野生動物のレスキューに出動します。ミルクを赤ちゃんにあげた後にやっと眠りにつこうとして、救急車の出動要請で起こされるということも何度もあったでしょう。

記事の中にもあるように、順調にいかない不安な時期も通り抜けなければなりません。成功しないケースもあるでしょう。心身ともにとても強くなければ、この命を守るお母さんの仕事は成し遂げられないのです。ヘレンさんは今では経験豊かな野生動物たちのお母さんです。でも、いつもの笑顔の後ろには大変な苦労と、時には悲しみもあるのです。

こうした活動がボランティアとして行われているということ、赤ちゃんコアラを育てるためのミルクやその他必要なもの全てボランティアが自己負担して行われていることも忘れてはならないでしょう。(文 平野聡美)

AJWCEF では今後も献身的で愛情に溢れた野生動物ケアラーたちの活動の支援を続けていきます！

オーストラリアの生物学的多様性
「オーストラリアの生物学的多様性保護における国家方針」より
文・写真 アラン=マッキノン モギルコアラ病院 獣医師

「生物学的多様性は、土壌の肥沃度維持やきれいな新鮮な水や空気の供給といった生態学的貢献を通して人間の生活の基盤を支えています。オーストラリアの生物学的多様性は多大な科学的価値を持ち、その多くの要素はユニークです。オーストラリアの有袋類は、多種多様に進化し、他の国々では主に胎盤哺乳類によって果たされる生態的役割を広範囲にわたって担っています。

オーストラリアに生息する種の多くがオーストラリアにだけ固有に存在します。哺乳類では6つの科、鳥類では4つの科、植物では14科が固有であり、他の国々に比べると非常に多くの科が固有なのです。オーストラリア生物相における高レベルの固有性は、オーストラリアが巨大な生物多様性をもつ12カ国の一つと考えられている主な理由です。

少なくとも5万年間に渡って、人間の活動がオーストラリアの生態系を変化させてきました。しかし過去200年の間で、その速度や範囲は著しく増加しています。

過去数十年間での環境意識の向上にもかかわらず、オーストラリアの生物学的多様性は過去および現在の活動による脅威に晒されています。生息地の破壊、変容、断片化は生物学的多様性に対して最も大きな脅威をもたらしています。植物種や動物種の過度な採取、外来種による影響、土壌や水、大気の汚染も深刻な脅威となっています。」



私たちは、しばしば日々のニュースで「経済か環境か」という発言を聞きます。こうしたコメントは現状に対する根本的な誤解をはっきりと示しています。現実には、環境なしに経済はないのです。

人類は生物多様性の統合された構成要素のひとつとして進化してきました。地質学的な尺度でいえば、私たちは比較的新しいのです。しかし、私たちの生物多様性に対する増え続ける影響をいつまでも継続するわけにはいきません。私たちが共同で自然環境の扱い方を変えない限り、まもなく私たちは自分たちの行動の結果に苦しむことになるでしょう。最近の気候における変化は、私たちにこれからの有様を体験させてくれています。

現在の科学的知識からいえば、知られている宇宙の中で地球という惑星にだけ生命が存在しています。地球上の生命の多様性はあらゆるレベルで壮大です。この私たちを包囲している美と驚嘆すべきものが、私たちの活動によって脅かされていることは大変心の痛むところです。

生物学的多様性は高く評価されるべきであり、また保護されるべき国有財産です。私たちの健康はこれに依存しており、私たちの将来の繁栄を確かなものにするためには、もっと高い認識が必要とされたいと考えます。

活動報告

2012 年 10 月から 2013 年 4 月まで

2012 年度オーストラリア野生動物保護セミナー

1. 麻布大学 11 月 2 日（金）

オーストラリア野生動物の現状と保護、AJWCEF オーストラリア野生動物保護トレーニングコースについて、オーストラリア野生動物保護トレーニングコース参加報告

2. 日本獣医生命科学大学 11 月 3 日（土）4 日（日）

ポスター展示、野生動物保護ビデオ上映、オーストラリア野生動物の現状と保護、AJWCEF の活動と野生動物保護、トレーニングコース説明会および参加報告、

3. 帯広畜産大学 11 月 18 日（日）

オーストラリア野生動物の現状と保護、AJWCEF オーストラリア野生動物保護トレーニングコースについて、オーストラリア野生動物保護トレーニングコース参加報告

4. 北里大学 11 月 19 日（月）

オーストラリア野生動物の現状と保護、AJWCEF オーストラリア野生動物保護トレーニングコースについて

5. 岡山理科大学 11 月 20 日（火）

オーストラリア野生動物の現状と保護、AJWCEF オーストラリア野生動物保護トレーニングコースについて、オーストラリア野生動物保護トレーニングコース参加報告

6. 大阪府立大学 11 月 21 日（水）

オーストラリア野生動物の現状と保護、AJWCEF オーストラリア野生動物保護トレーニングコースについて、オーストラリア野生動物保護トレーニングコース参加報告

7. 可児産業展 11 月 25 日（日）

オーストラリア クイーンズランド州の自然、オーストラリアの珍しい動物たちとその保護、ビデオ上映

メディア

1. Facebook「Friends of AJWCEF」を 始めました。

2. 日豪プレス 2013 年 3 月号『オーストラリア留学を 未来を担う第一歩に』の記事にて紹介されました。

3. テレビ朝日『奇跡の地球物語 オーストラリア～進化の教科書～』

2013 年 4 月 7 日「有袋類」、14 日「コアラ」の取材に協力し番組にて活動が紹介されました。

インターネット中継教育

1. 2013 年 4 月 オーストラリア ブリスベン市、レッドランド市、イプスウィッチ市、ゴールドコースト市などにある野生動物及び環境保護施設と、岐阜県可児市にある可児工業高校を中継で結びオーストラリアの自然、生活、環境保護活動などを英語で紹介する 2013 年度中継教育活動を開始しました。

野生動物保護トレーニングコース

1. 2013 2 月 初級トレーニングコース

事業

1. ユーカリ植林事業

（モギルコアラ病院、プレンバイル小学校、ケンモア・サウス小学校、AJWCEF での共同事業継続中）

2. オーストラリア日本研究交流事業

（クイーンズランド大学、日本獣医生命科学大学、モギルコアラ病院、デービッドフレイ野生動物公園など）

寄付 (2012 年 10 月以降)

1. 2012 年 10 月 12 日 モギルコアラ病院：\$ 1200
2. 2012 年 10 月 16 日 イプスウィッチ コアラ保護協会：\$ 100
3. 2013 年 3 月 20 日 イプスウィッチ コアラ保護協会：\$ 200
4. 2013 年 3 月 20 日 モギルコアラ病院：\$ 1200
5. 2013 年 4 月 22 日 クイーンズランド コアラアクショングループ：\$ 400
6. 2013 年 4 月 22 日 プレンヴェイル小学校 ユーカリ植林計画：\$ 100



イベント情報

トレーニングコース

- ① 2013 年 8 月 16 日 (金) - 8 月 24 日 (土) 9 日間 **現在募集中!**

オーストラリア野生動物保護トレーニングコース (海洋生物初級)

開催地：オーストラリア クイーンズランド州

- ② 2013 年 8 月 24 日 (土) - 9 月 7 日 (土) 15 日間 **現在募集中!**

オーストラリア野生動物保護トレーニングコース (初級)

開催地：オーストラリア クイーンズランド州

スタディーツアー&トレーニング **現在募集中!**

- ① 2013 年 11 月 11 日 (月) - 11 月 16 日 (土) 6 日間

オーストラリア野生動物保護スタディーツアー&トレーニング (プロフェッショナル)

— コアラの臨床と管理 —



(写真：2013 年 2 月 AJWCEF 野生動物保護トレーニングコース・初級より)

AJWCEFスタッフ紹介

Sumika

初めまして。帯広畜産大学で生命科学を学んでおりますSumikaです。2012年8月のトレーニングコース初級に参加後、広報とブログのお手伝いをさせて頂いております。家族旅行がきっかけで、その環境や動物に魅了されてからというものオーストラリアが大好きになり、トレーニングコースに参加させて頂くことにしました。オーストラリアでは、獣医師や専門分野の方のみでなく、専門知識がなくても「動物が好き！」との思いのみで保護活動に参加している方がたくさんいらっしゃり、大変感心しました。私も「動物が好き！オーストラリアが好き！」なので、大学の専攻では野生動物保護や環境保全と言ったことに直接関わることは少ないかもしれませんが、こちらでお手伝いをさせて頂くことで、少しでもお力になればと思います。



北村優



はじめまして。公報ボランティアに参加させていただいています北村優といいます。岩手大学で獣医になるための勉強をしています。財団のことは、先生が講義で紹介してくださったことから知り、在学中に一度だけでも外国に行き、その国特有の動植物に実際に触れてみたいと考えていたので、こんな機会は2度とないと思い、一昨年トレーニングコースに参加させていただきました。英語はほとんどしゃべることはできない私でしたが、オーストラリアでは、コアラをはじめとする固有種との貴重な触れ合いをさせていただき、またオーストラリアでおこっている野生動物を取り巻く問題も勉強させていただくことができ、とても充実したものになりました。またなにより、日本では報道されていない問題であっても、日本も関わってくる問題もたくさんあることを知り、愕然としました。私の将来の目標は野生動物に関する事ではありませんが、トレーニングコースで教えていただいたことをより深く知っていきたいと思い、オーストラリアの新聞記事を日本語で紹介するブログのボランティアに参加させていただいています。野生動物に関する知識は少なく、英語も不得手なのであまりきれいな文章にすることはできませんが、担当させていただく記事を正確に知っていただけるように頑張りたいと思っていますのでよろしくお願いします。

会員 (個人・法人) 募集 及び 支援寄附のお願い

皆さまのご支援が小さな命を助けます

詳細は、AJWCEFのサイトwww.ajwcef.orgで『参加・協力』のページにお進みください。

ニューズレター発行元

オーストラリア野生動物保護教育財団本部事務局

発行責任者 水野哲男

編集担当 平野聡美

ホームページwww.ajwcef.org

住所 PO Box 1362 KENMORE,
QUEENSLAND, 4069, AUSTRALIA

電話 +61 7 3374-3909 FAX +61 7 3374-3531